討論

■発言者

鈴木 絢女(司会)…日本学術振興会特別研究員・政策研究大学院大学
内田 晴子 ……京都大学大学院
舛谷 鋭 ……立教大学
伊賀 司 ……神戸大学大学院
山本 博之 ……京都大学地域研究統合情報センター
中村 正志 ……日本貿易振興会アジア経済研究所
村上 咲 ……京都大学大学院
塩崎 悠輝 ……同志社大学大学院・在マレーシア日本大使館
西 芳実 ……東京大学
川端 隆史 ……外務省
鳥居 高 ……明治大学

メディアの変化か社会の変化か

山本　伊賀さんに質問です。オルタナティブ・メディアが総選挙の裏側で起こっていた地殻変動だったというお話でしたが、何らかの現実の変化があって、それが主流メディアを通して出てくる場合とオルタナティブ・メディアを通して出てくる場合とで違いがあるということなんでしょうか。今回の選挙結果を現実が既に変化していたと説明するのか、現実は大きく変わっていないけれどそれがどう見えるかという部分で変わったと説明するのか、どちらの側に重点を置いて理解すればいいんでしょうか。

伊賀　両方だと思います。すでに現実が進行していて、その直接のきっかけが去年の事件だったというのが私の話です。

山本　進行している現実というのはどんな現実のことですか。

伊賀　今回の選挙に関して言えば、去年の９月あるいは11月に起こった事件が大きかったと私は考えています。９月に弁護士がプトラジャヤでデモ行進をして、かなりの人数が集まりました。このときは人々がそれを見たということでオルタナティブ・メディアが力を発揮しました。11月のBersih、そしてHindrafにしても、YouTubeのような映像メディアがどんどん映像を配信してみんなができごとを知り始めます。これが今回の選挙に直接に影響したと私は考えています。しかし、その底流として1990年代末からマレーシアに情報関連のインフラが徐々に進行してきたということは現実としてありました。そのうえで、今回の選挙に直接影響したのはさっき挙げた３つの事件が大きかったと考えています。

山本　３つの事件はオルタナティブ・メディアそのものと関係しているわけではなくて、社会が実際に変化していて、オルタナティブ・メディアはそれを世の中の人たちに伝える役割を果たしたということですね。

伊賀　そうです。オルタナティブ・メディアそのものではなくて、オルタナティブ・メディアが有効に使われて人々が現実を知るきっかけになったということです。オルタナティブ・メディアが報道していることをみんなが知るわけです。YouTubeが使えるという話になって、それを見てみようといってみんながどっとYouTubeにアクセスして、そこで現実の映像が見られるんです。現実のできごともありますが、それとの相互作用でオルタナティブ・メディアもすごいということがみんなにわかり始めてきたということだと思います。

山本　それではご報告のタイトルにある地殻変動というのは何なんでしょうか。オルタナティブ・メディアの分野で地殻変動が起こっていたということですか。現実のマレーシア社会でオルタナティブ・メディアと違うところで地殻変動が起こっていて、それがその今回の選挙で影響力を及ぼしたということ

ではないんですね。

伊賀　地殻変動という言葉をタイトルで挙げたときは、メディアに関して、あるいはメディアを見る人々の認識が地殻変動を起こしているというところしか考えていませんでした。私の考えている地殻変動というのは、政治社会に対するメディアを通じた認識なりメディア自身に対する認識なりが大きく変化しているということです。

見た人が変わるのか、見られた人が変わるのか

西　主流派のメディアに対する不満はおそらく以前からあって、これまでは噂話をしたりしてそれぞれのプライベートな空間で不満が出されていたのだろうと思います。インドネシアも言論が統制されているとは言いますが、その裏で反政府的な読み物が陰で回覧されたりしていました。そういう意味でのオルタナティブというのは常にあっただろうと思うんですが、今日のお話は、それがインターネットに出ることでマレーシア国内で広く共有できるようになったということでしょうか。さらに話を広げて、外の世界の人たちも、現地で噂話を聞かなくても現地の様子がわかるようになったから変化が見えるようになったとは言えないでしょうか。つまり、もともとオルタナティブな言論の場はあって、主流派メディアに対するいろいろなアプローチはあったけれど、これまでは外からは見えなかった、でも今回はインターネットで記録に残ったり国外からもアクセスしたりできるようになって見えやすくなったと。だから、主流派メディアや政府がそれに対応しなければいけなくなったのだけれど、主流派メディアに対する不満などの情報が流れていくという点を見れば、構造自体は大きく変わっていないのではないかと思いますが、どの点が大きく変わったと考えればいいんでしょうか。

伊賀　オルタナティブ・メディアが出てくる以前に噂話などがあったというのは当然そうです。コーヒーショップで噂話をしたり、その口伝えで伝わっていったりというのはありました。最近の事例として私が指摘したいのは司法の話です。司法改革の話はずっと前からあって、知識人たちはこれが根の深い問題だというのは既にわかっていたわけです。しかし一般の人々にとって司法の話は行政府や政党の活動ほどにはわかりにくいわけです。それが、一般の人々は最近になって、この問題がぱっと外に出てきて、しかも衝撃的な映像をビデオで見ることができて、その瞬間にようやく問題を理解するんです。イシューによって、一般の人々と知識人の中で広まっていた話は違うと思います。そういう面で、国民みんなが問題を共有するようになったのはオルタナティブ・メディアが入ってきてからだと思います。

山本　西さんの論点は、主流メディアに対する不満を流通させる手段はいつの時代にもあったということに重点が置かれているのではなくて、その広がりなどにどういう違いが見られるかという質問だろうと思います。私が見ている1950年代の話を例にとると、マレー語の新聞や雑誌が創刊されて、村のイマームがこんな悪いことをしているということが投書欄に載るようになります。これに対して、新聞や雑誌に書いて他人に読ませるのは身内の恥さらしだからよくないという意見も出るんですが、新聞に書くことで世の中の人たちに問題のありかがわかって問題解決につながるのでどんどん書くべきだという意見も出て、その結果、宗教の問題を新聞に書いてもいいことになったということがありました。読者が現実を知ることができるようになる手段としてオルタナティブ・メディアが重要だということもあるんでしょうが、西さんが言ったのは別の側面で、特定の身内の範囲を超えた広がりの人々に知られてしまっているというメッセージを当事者に伝えることで、そのメッセージが変革のきっかけになったという要素は考えられないかという質問だと思います。

伊賀　オルタナティブ・メディアで出た話は、みんながどんどん知っていきます。そうすると、主流メディアもそれを採り上げざるを得なくなります。そういう意味で、オルタナティブ・メディアの範囲を超えて議論が拡散していったということは、この数年の間に起こってきた新しい現象だと言えると思います。

インターネット以前の華語メディア

山本　その広がりがどこまでいくんでしょうか。今のご説明だと話が国内に限られてしまいませんか。伊賀さんのお話にはもっと別の広がりもあるんじゃ

ないですかというのが西さんの問いかけで、国内だけではなくて世界の人が見ていて恥ずかしいから態度を変えなきゃいけないと思わせる働きもあるのではないかということだろうと思います。主流メディアとオルタナティブ・メディアの関係自体は昔からあったことだと思うんですが、今回はどこがどう違うのかを考えたとき、その可能性として、ずっと広い範囲の人々がずっと短い時間で見られるようになったことが大きな違いだと考えていいのかというようなことです。

舛谷　私は華語のことしかわからないんですが、主流メディアが完全にプロパガンダになっていたという伊賀さんの議論は、イシューによってはそうでもないと思います。それはともかくとして、今の山本さんのご指摘の例に当たると思われるものを紹介します。インターネットが普及する以前に都市の華人がどういうメディアを見ていたかというと、国境を越えるメディアとして注目されていたのが衛星放送でした。マレーシアの衛星放送にはアストロがあります。アストロはたぶん日本のスカパーよりも広まっていて、BSに近い感じだと思えばいいでしょう。アストロにはいくつかチャンネルがありますが、そこに台湾資本だけれど香港から放送しているフェニックスというメディアがあって、今日の華字紙というコーナーがあります。今日の星洲日報ではこういうニュースが報道されていましたということが、グローバルな華人社会の中で共有されていくんです。もう1つ、活字メディアについて言えば、亜洲週刊というアジアン・ウィークリーの中国語版がありますが、世界中でどこの国の華人がこの雑誌を一番買っているかというと、マレーシアなんです。いろいろおもしろい人がマレーシアの特派員になったりしていて、マレーシアのいろいろなイシューについて細かく解説が載っていたりします。そういうものが、外からの目というか、華人のメディアの中でフィードバックされていると私は感じています。

動画を見ることによる実感

中村　私は個人的には、伊賀さんの言っていることに感覚的に同意するところがあります。この4年間でマレーシアで目立って変わったこととして、ブログや動画のアクセスが楽になったのは間違いないと思います。これはこの4年間で区切っていいと思います。完全に主観の話になりますけれど、動画を見ると実感として違うように思います。一番はっきり目立つ変化はそこかなという気がしています。それで、伊賀さんに対しては無理難題になるかもしれないですけれど、データについてちょっとコメントします。野党が議席を伸ばした州でオルタナティブ・メディアが支持されているというデータはおもしろいと思いますけれど、あれだけだともともと野党を支持する気持ちがあったからオルタナティブ・メディアを信用するようになったのか、オルタナティブ・メディアを見るようになったから野党を支持するようになったのかという因果関係の方向性がわかりません。伊賀さんの報告の趣旨はオルタナティブ・メディアを見るようになったから野党を支持するようになったという議論だと思うんで、それをきっちり出せるように議論を組み立てられるともっとよくなると思います。

伊賀　最初の点については、今まで華字紙や他の新聞紙にある程度の政府批判が載っていたこともありますが、ダイレクトな言葉で書いていたわけではありません。体制の統制が厳しい時は、何らかの隠語を使ったりして、特定のコミュニティーにだけわかるような言葉で書くわけです。それと比べて、オルタナティブ・メディアだと批判はダイレクトに出ますし、動画は見てすぐわかります。そういう意味でオルタナティブ・メディアには新聞での批判記事と違う衝撃力があると考えています。最後のご指摘はよく考えておきます。

内田　私も、動画についてはインターネットだから海外からも見られるということよりも、むしろマレーシア国内の人々が直接見ているということが重要だと思います。今までも新聞に批判が載っていたということではなくて、人々が複数のメディアを手に入れて、オルタナティブ・メディアをこそ信じるというか、こちらのほうこそが真実だという認識が成立してしまったことがポイントではないかと思います。これは、UMNO離れは政策が問題なのではなくて認識の問題だったという昨日の議論と繋がっています。UMNOへの不満が可視化されたことにこそ意

味があったのではないかと思い、伊賀さんのご報告はその点でも意味があると思いました。

年代別の投票行動調査

内田　もう１つ、これは伊賀さん以外の方への質問でもあるんですけど、いま、マレーシアの政治家たちは若い人たちがオルタナティブ・メディアに走ったと理解しているけれど、これは本当にそうなんでしょうか。30代や40代も仕事でパソコンを使っているので、若い人だけでなく年代を超えてアクセスがあるんじゃないかという気がします。年齢別の投票行動調査や出口調査などは可能なのか、あるいはそういうデータが出てきそうでしょうか。実際に世代別に捉えることが今のところ技術的に可能なのかというのが質問です。

伊賀　複数のメディアを手に入れたというのは重要で、複数のチャンネルから選べるというのは大きいと思います。自分が信頼するメディアはこれだ、オルタナティブ・メディアの１つだ、というのができたのがたぶん大きいんだと思います。世代別に投票行動がわかるかとういうのは、選挙の分析を系統的にやっている人たちに答えていただければと思います。

中村　確かあります。投票時間を一定程度分けているらしいです。自分で見たことはないんですが、そういう研究を見たことがあります。New Politics in Malaysiaという本のなかに、年齢別に投票時間を分けることを英語で何とかという特定の言いまわしがありました。読んだ感じだと、この年代の人はこれくらいの時間に投票するというように時間がある程度割り当てられていました。その時間帯でないと投票できないのかはわかりませんが、ずっとそこに張り付きで調べるとある程度わかるらしいです。どのくらい公式な制度としてあるのかは、つっこんだ記述がなかったのでよくわからなかったんですけれど、まったくないということはありません。

伊賀　選挙監視をやっているMAFRELのようなNGOの選挙監視団に聞いてみたら出るのかもしれません。きちんとしたデータとして出るかどうかはわからないですけれど。

川端　出口調査は、マレーシアの場合は難しいんじゃないかと思います。マレーシアの人たちが出口調査のやり方自体をよく知らないという問題もあるんですけれど、投票所の近くに行って出てくる人をつかまえてどっちの政党に投票したかを聞いたりしたら、たぶん何をやっているんだと言われるでしょう。やるなら調査ビザとかを申請した方がいいだろうと思います。他のやり方もあるかもしれませんけれど、精度の高いものを取ろうとするとそうなってくるかなと思います。もちろん、選挙の後にアンケート調査やインタビュー調査をやるというやり方はあると思います。現状では難しいのかなと思いますが。

「Rakyat」（人民／民衆）に込められた意味

鳥居　野党連合のRakyatという名前にこだわってみます。選挙を分析するのに民族で説明しようとする、あるいはイスラムで説明しようとするのが我々が昨日から試みていることです。DAPは、もともとの文脈では華人のうち富裕でない層の人々が支持しているという理解が今まであります。PASに関しても、イスラム教であるということに加えて、ムスリムの貧しい人たちという理解も今までありました。Rakyatというのは社会階級や社会階層という文脈で左翼が使ってきた言葉で、サイド・フシン・アリが率いたParti Rakyatは極めて左翼的なものでした。その面を見ていくと、DAPやPASを社会階層で捉えてRakyatという言葉を格差の問題の表現と理解するならば、この４年間の経済状態がどうだったのかを議論していないと気づきました。そもそも民族以前に、人々は職がなかったり物価が上がったり生活が苦しくなったりしたら政権を支持しません。今の経済成長率は６％くらいですか。

中村　去年は6.3％で、インフレも2.0％なんですが、それを額面通り受けていいかという問題はあります。でも額面通り受け取らないとするなら、つっこんでちゃんと分析しないといけません。

鳥居　ここで話をしていて思いついたことなのでデータを持ってきてはいませんが、１年に１回とか半年に１回とかたまにマレーシアを訪れる身として、生活が苦しくなった、特に食事代が高くなったという実感を持って３月に帰ってきました。人々もその問題を指摘していました。そうすると、人々がなぜ政権にノーといったのかを経済面から見て議論しな

きゃいけないのかと思います。Rakyatという言葉をずっと見ていくとおもしろいだろうと思います。野党陣営は、1990年はGagasan Rakyatという言葉を使っていました。1999年はBarisan Altanatif、代替戦線と言っていますが、これはBarisan Nasional国民戦線の代替ということです。今回はBarisan RakyatになってPakatan Rakyatです。Rakyatという言葉がマレーシアの政治文化や人々の中でどういう意味を持っているのか、このあたりは山本さんの領域じゃないかと思うけれどどうですか。

山本　Rakyatの話に行く前に民族について１つ確認させてください。民族以前に経済が悪ければその政権を支持しないというのはその通りだと思います。でも、そのことを「民族の政治」と結びつけるのは適切でないように思います。このフォーラムでは民族で捉えようとしているんですが、それは何々民族だから何々民族に投票するというような、民族性が投票行動を規定するという昔あったような単純な民族理解ではなくて、例えば物の値段が上がったとか食べ物の値段が上がったとか経済的な状況が悪くなった時に、どの経路で、どの枠組でその悩みの解決を求めるのかを考えたとき、古典的なマレーシアでは民族という経路をたどるしかなかったけども、それがまだ有効なのか、それとも違う経路をたどりうるのかという話です。自分が華人だから華人候補に入れようというような、民族性によって自動的に投票するという話をしたいわけでは全然ないんです。だから民族よりも経済が大事かどうかという問題の立て方をするべきではなくて、経済など大事な問題であるときに民族に頼るのをやめたのかどうかが問題になっているということを改めて確認させてください。

Rakyatについては、私も野党連合がNasionalではなくRakyatと名乗ったのはどういうことなのか質問しようと思っていたところです。歴史的にみればRakyatは主に左翼が使ってきたというのは確かにそうですが、でもマハティールもけっこう演説の中で使っています。マハティールがRakyatと言っているときにそれが指している範囲は、おそらく国民という意味に近いんじゃないかと思います。マハティールがRakyat Malaysiaと言ったとき、大づかみでいえばマレーシアの国籍保持者で、そこから除外されている人たちがいるとしたら、もしかしたら王族と、それからマハティール自身くらいだろうと思います。つまり、Rakyatというのは国民というかネーションというか、インドネシアでいうとBangsaで表現されるようなものがマレーシアではRakyatで表現されているという印象があります。だから、そういう意味ではRakyatを使っているのは必ずしも左翼だけではありません。

川端　経済の議論がないというご指摘がありましたが、経済については第９次５ヵ年計画のDevelopment Composite Index by Stateというのが手元にあります。クアラルンプールも１つの州と擬制的に見て、合計14州を並べて見ていくと、野党政権ができた州は数値が100に達していない、つまりマレーシア標準値に達していないんです。過去の選挙のときで見ると、14州あるうちトレンガヌが14位、クランタンが13位です。今回の選挙では、クアラルンプールは野党がずっと強いというのはありますけども、２位のペナンと４位のスランゴールで野党政権ができたことは何を意味するのか、よく考えなければいけないと思います。

Rakyatについては、先ほど山本さんからお話がありましたが、Parti Keadilan Nasionalの党名がNasionalからRakyatに変わったのはとても興味深いと思っていて、今回も議論したいと思っていたんですが力及ばずでした。マハティールがRakyatという言葉を使っていることや、左翼系もRakyatを使ってきたという歴史をご紹介いただきましたが、選挙戦を見ていくと、まさに山本さんが指摘したようにRakyatの意味あいが違ってくるというか、BNがいうRakyatの意味はマハティール政権期に与党が言っていたRakyatとけっこう違っていたように思います。そこでRakyatから洩れるのが野党なのかなと思います。この言葉が使われている文脈は、かつての左翼系が言っていたような貧困層でしょうか。Rakyatが経済的に困っているとか機会の均等が得られていないとかいうのが野党のRakyatで、与党の言うRakyatの中に野党の言うRakyatの意味が入っていないから野党側にRakyatが出てきたかもしれません。

塩崎　Rakyatはもともとアラビア語で、語源は羊の

群れです。Raiは羊飼いですが、統治者でもあって、例えばスルタンがそれにあたり、人民がRakyatとなります。マレーの文脈だとラジャやスルタンがいて、それに対してRakyatがいるということだと思います。PKRは、PRMも入っているし、NGOも多いので、Rakyatという言葉が好きです。PASも昔からRakyatをよく使います。PASの一番目のスローガンはHidup Islam, Hidup Rakyatです。非ムスリムと連携したり経済的な闘争をしたりする時にはHidup Rakyatと繰り返します。ただし、Rakyatと言ったときに必ずしもスルタン制に否定的なわけではありません。Bersihが繰り返していたのはHidup Rakyat, Daulat Tuankuでした。だから、必ずしもスルタンを否定するわけではないんです。総選挙後にアンワルは、Pakatan RakyatというのはBarisan NasionalやUMNOのKetuanan Melayuと違ってKetuanan Rakyatにするということだと言っていますが、Ketuanan Melayuが論争の的となっていて、例えばBNの中でもMCAとUMNOがこれについて争ったり、あるいはDAPがKetuanan Melayuを強く批判したりしているし、一方でPASは、UMNOがKetuanan Melayuと言ってるけれどそれはよくないのでKetuanan Islamと呼ぼうと言っています。これはKetuanan Islamなら呑めるという話で、UMNOの一部にマレー人の大連立に向かう動きがあって、その人たちがKetuanan Melayuを結節点にしようとしています。蛇足ですが、３月８日の夜に総選挙結果が出たときにPKRの支持者が集まりました。マレー人も華人もインド人もいたけれど、華人がはしゃいで今日がKetuanan Melayuが終わる日だと叫んでいました。同じPKRのマレー人がこいつらは何を言っているんだという目で見ていたのが印象的でした。

「We, Rakyat...」

村上　お二人の発表では、野党が強くなったのもオルタナティブ・メディアが強くなったのも、いわゆる中間層に支えられていたためとされています。そういう中間層的なものが地殻変動の１つの鍵かもしれないという話がある一方で、今度は格差の話が出てきました。世界的に見て去年の夏あたりから物価の値上がりなどがあり、そういう意識はおそらく共有されていると思うんですが、２つの全く異なる経済的指標でありながら異なるイシューがでてきたのでちょっと戸惑ってしまいました。おそらくお二人は、メディアであれ党であれ、中間層的なバックグラウンドを持つ人たちがある程度増えていて政治変動を促し、それが波及するために例えばRakyatというレトリックを使ったと考えられているのかと思いますが、つなぎの部分に何があるのか教えてほしいというのが１点目です。それから、日本人の目で見てもインドネシアのことを見ても、これだけ経済力があって中間層的なものが出ているところで70％～80％の投票率を維持しているのは不思議です。それこそオルタナティブな側が白票運動とかをしないのかとか、なぜそこまで政党にこだわるのかがよくわからないので、その点を教えてください。

鈴木（司会）　１つ目の質問にはちょっとついていけなかったんですが。

村上　Rakyatという言葉は、例えば動かしているエンジンの側と有権者の側を結ぶようなレトリックとして使われたのか、そういった考え方ができるのかということです。中間層という言葉を使ったり、Rakyatという言葉を使ったりしていますが、お二人はどちらが強かったと思われるのかというのが基本的なラインで、その中でRakyatを考えるとどうなるかが別の質問です。

鈴木　「中間層という言葉を使ったり」という「使ったり」の主語は何ですか。

村上　お二人の発表ではオルタナティブ・メディアが強くなった理由として中間層の問題が挙げられていたので、それと今の議論はつながらないことをどうお考えですかという質問です。

伊賀　メディアをやっている人たちが自分たちのことを中間層と言うことはないんですけれど、今話に上がっているRakyatはブロガーたちがよく使っています。英語の文で「We, Rakyat」という表現が出てきます。そういう意味ではRakyatという言葉はブロガーたちの間で既に一般化していて、私の報告の議論の延長線として言えると思います。２点目の投票率が維持された話については、私はマレーシアに特殊な事情があると思います。マレーシアの選挙では投票する時に自分で有権者リストに登録しなければ

ならなくて、登録した場所で投票します。一度登録したら別の場所に移すには自分で登録しなおさなければならなくて、日本のように住民票といっしょに自動的に動くという形ではないので、多くのマレーシア人は出身地で有権者登録しています。選挙のときにバスなどの公共交通機関に乗ってわざわざ田舎に大移動するんです。今回の選挙でもそれが起こりました。そういう意味で、参加民主主義というか、厳密な民主主義の適用は、マレーシアは他の国と比べて度が過ぎていると感覚として感じています。

山本　ブロガーがRakyatを使っているということですが、英語で書くとRakyatの部分はどう書くんですか。

伊賀　英語で書き換えたりしないんです。英語の文にいきなりRakyatっていう単語が、何の説明もなく出てきます。

投票率が高いのはなぜか

中村　投票率が高いのは、伊賀さんの話にも出ましたが、有権者が登録制だというのがけっこう大きいんじゃないかと思います。はなから政治にまったく関心のない人は有権者登録しないでしょうから。

川端　選挙に参加しないことについては、そもそも関心がある人が集まっているという中村さんのご指摘もありますけれど、半島部に限るという限定付きの議論ですが、マレーシアにおける富の再分配を考えた時に政党ルートが大きいということが１つあります。いくつかの研究書でも事例として取り上げられていますが、1980年代にPASの村とUMNOの村というのがあって、当時与党はUMNOだったため、奨学金を得ようとUMNO支持の村長のところにPAS支持者が行っても奨学金を出してくれないとか、道路整備でもUMNO村はまでは舗装されるけれどPAS村は舗装されないとかいうことがありました。今までは政治参加とはUMNOを中心としたBN体制の中で富の再分配の中に入れるという意味があったけれど、今回はそこではない何かが働いたのだろうと思います。それが何かはよくわかりませんが。

Rakyatの概念とか中間層とかいう社会階層の問題では、PKRの候補者をもうちょっと見ていきたいと思っています。州ごとや選挙区ごとの経済発展の度合いや社会的なインデックスを見ていくと、候補者のエスニシティを分けていたり、候補者の出身背景を分けていたりということがあるかもしれないと思います。PASが強いところはもともとイスラム寄宿塾があってPAS支持者が多いところで候補者を立てているし、DAPはこれまでの選挙でもけっこう勝率が高くて自分たちが勝てる選挙区に候補者を立てるというやり方をしています。候補者の社会階層の話から見るとそういうところが出てくるんじゃないかと思います。

手続き的な民主主義の度合いの高さ

伊賀　マレーシアの民主主義の話で追加ですが、猪口孝さんが中心となってアジアの数ヵ国で中間層に関する統計を取ったアジアバロメーターというのがあります。今回の選挙に関連しておもしろい結果が出ているので紹介します。マレーシア、インドネシア、フィリピン、シンガポール、タイを比べたとき、国会や選挙に制約されない強力なリーダーによる統治を支持するのが、マレーシアは19％、インドネシアは34％、フィリピンが31％、シンガポールが25％、タイが28％で、マレーシアは一番低くなっています。専門家が専門領域で意思決定するような政治体制への支持は、マレーシアが36％、インドネシアが71％、フィリピンが63％、シンガポールが47％、タイが62％でこれもマレーシアが一番低いです。軍事政権への支持では、マレーシアが19％、インドネシアが70％でこれはどう理解すべきよくわかりませんが、フィリピンが34％、シンガポールが22％、タイが54％でこれもマレーシアが一番低いんです。民主的政治体制への支持は、どの国も高いんですけれど、マレーシアが90％、インドネシアが93％、フィリピンが81％、シンガポールが79％、タイが99％あります。これが2004年の調査結果として出ています。感覚ですが、マレーシアは手続き的民主主義という面では非常に意識が高いと言えると思います。民主主義をどう捉えるかはいろいろ議論がありますが、人々の認識では手続き的な民主主義というか参加民主主義というか、そういう観点でマレーシアの人々は非常に意識が高いということが言えると思います。

Rakyat と People

川端　先ほどブログで英語の文でもそのままRakyatと使っているという議論がありました。フィリピンでピープルズ・パワーがあったし、昨日の報告でもマカルサッティというスローガンの意味がピープルズ・パワーだというのがありました。JAMSのおととしの研究大会で山本さんが５つのBangsaという考え方を発表して、私が参加した別のセッションではフィリピン研究の川島緑さんがBangsamoro Peopleというのができていると発表して、お二人はまったく別個の話をしていたのですがバンサの議論に重なりが出ていたように思います。Rakyatは、もしかしたら野党側がバンサを１つに接合させる概念として、まさにピープルズ・パワーのようなものを想定して使っているのかなと思いました。

鳥居　Rakyatの問題は、まさにこのフォーラムのタイトルである「民族の政治」と関係があります。政党名にMCAだとChineseのCが入る、MICにIndianのIが入る、そういう政党が集まってBNを作るというのが今までのマレーシア政治の仕組だったわけです。それにかわってRakyatという言葉がマレーシア政治でそれなりの意味を持っていくのであれば、あるいは、昨日の金子さんの報告の最後でMCAとMICは存続する意義があるのかという提起があったように、党名にCやIを掲げることがマレーシア政治の枠組で意味がなくなっていくのかということが、マレーシアの新しい政党政治の枠組を議論するきっかけになるかもしれないという提起です。

山本　私の考えも基本的に同じ方向を向いていますが、BNのあり方についてちょっとだけ違う説明をします。党名にMとIとCが入る政党は、BNの前身であるマラヤ連盟の時に作られた３つの政党だけです。独立後しばらくはマラヤ連盟体制でやってきたけれど、それではうまくいかなくなって新党が作られました。DAPもGerakanもそうです。新党はいずれも民族政党ではないという形で作られて、だから党名にMもCもIもついていないんですが、それをマラヤ連盟が取り込んでBNが作られます。取り込まれた側はBNに入ることで政府に代表を送る経路を確保することになるけれど、その一方で、多民族包括的な性格を維持しながらも特定の民族を代表しているという見え方をせざるを得なくなります。ということで、BNは確かに民族ごとに代表するという形をとっているけれど、各民族を代表する政党と自任したのは最初の３つだけでした。あとから入ってきた政党は多民族包括型と民族利益の代表という両方の性格が混ざっています。Gerakanが多民族包括型の政党なのか華人政党なのかという問いにどちらの答えもありうるという答えになってしまうのはそういうことだろうと思います。それがこれからどうなっていくのかは興味深いところですが。

内田　川端さんのお話を補強する情報を1つ提供します。1999年だったと思いますが、マニラ・ロータリークラブに、これはフィリピンにあるロータリークラブのなかで一番古くて格の高いクラブですけれども、そこにワン・アジザが特別ゲストで来ていました。ふだんロータリーの会合はクローズドですが、その時はオープンで、マニラホテルの一番大きい宴会場で数百人を集めた昼食会で、コリー・アキノと共に手を挙げて「People Power!」とやっていました。インドネシアでもマレーシアもそうだと思うんですけれど、東南アジアで社会改革運動をしている人たちは国境を越えて横でつながるし、資金も人も派遣するし、リーダーたちの間ではピープルズ・パワーというレトリックの運用も意識的にやると思うんです。その部分と、実際にそれを聞いた人々がRakyatという言葉をどう理解し、どう語って、どう伝えていくかという話とは分けて議論するべきではないかと思いました。

野党はなぜ連携するのか

山本　川端さんに質問です。野党はどうして互いに連携する必要があるんでしょうか。１つの仮説は、野党が政権を取ることを目指し始めたため。もう１つの仮説は、1999年と2004年の選挙結果を比べるとDAPが野党連合から抜けると野党全体が議席を減らしているので、野党が３つ連合すると獲得議席が増えるからという理由で、政権を取るか取らないかとは直接関係ないところで野党が連合した方がいいという判断があるかもしれないと思いました。実際には、どうして３つの野党が連携しなければならないんでしょうか。

川端　政権を取るというのは目標として一応掲げています。

山本　本気で政権を取りに行ったんですか。

川端　そこは議論の必要があります。本気かどうか、彼らの意識については裏付けのあるお答えができないので控えさせていただきます。それはそうとして、1999年の選挙後は、1999年から2004年にかけて野党に政権担当への気運が高まったように思います。2004年選挙でのPAS候補者の立て方を見てみると、伝統的な地盤のクランタンやトレンガヌ以外でも、パハンとかスランゴールとか、そこからひっくり返して連邦政府を取りたいと言っていました。少なくとも主張としては政権をとるというのが出ていたと言えます。1990年の選挙は、政権をとるとは言っていましたが、そこまで本当に考えていたかは疑問です。先ほど今回の選挙で与野党の候補者の民族が食い違っている選挙区があるという話をしましたが、どこにどの候補者を立てるかという選択に政権を取りにいこうという戦略を立てて決めていた形跡がうかがえます。

塩崎　野党が連合するのは混合区で勝つためです。PASは従来華人やインド人の票を取れないし、DAPはマレー人の票をとれないので、野党連合によってカバーできないかという考え方がありました。新党が出るとなぜ野党が連合するかというのは、少なくともラザレーとアンワールの２人が本気で政権を取りたがったからだと思います。逆に言えば、この2人以外はそこまで真剣ではないと言えます。PASは、自分たちの政策目標が実現できれば野党連合が政権をとらなくてもかまわないんです。だから2004年には、単独過半数は無理でもマレー人の第一党になればMCAやMICもついてくるという勝手な前提があって、PASは強気に出たわけです。でも混合区で票を取れないから、野党連合を作る必要があるので新路線になったんです。

マレーシア国民の実体化？

山本　混合区で議席を取ることを目標に野党が連合したとすると、その前提にある考え方をこう考えていいでしょうか。昨日の話から考えると、これまではPASはイスラム国家建設を求めているのでほとんどの華人はPASに投票しないという常識があったけれど、今回の選挙では華人がPASに入れたという話でした。今回はそういう変化があって、それを見越した期待があったからこそ３つの野党が連合して混合区で野党連合が勝ったという話につながると思うんです。そうすると、その延長線上にある議論は、マレーシアはこれまで半島部にマレー人、華人、インド人の３つの民族がいて、それぞれ自分たちでやっていたけれど、今ではそのような民族意識は象徴的には残っていても政治経済的にはほとんど意味を失っていて、実態はすでにマレーシア国民というような感じで動いてしまっている。だからこそ、例えばPASが出てきても華人は安心してPASに投票できるようになった、と考えていいというところまでいきますか。

川端　PASは確かに混合区で勝っているということはあります。ただ、データを解析しきっていないんですが、先ほどお見せしたような与野党の候補者の民族性が合致していないところで、しかも混合区で勝っている候補者はPAS出身のマレー人にはあまりいません。DAPとPKR出身のマレー人、インド人ないしは華人ということなので。華人がPASに投票したというのは、調べようがないんですが、私が見ている限りは起こっていないと思います。

中村　私の分析ではPASとPKRがセットなんです。PKRも華人は少なくてマレー人が多いです。セットで見て、今までのようなはっきりとした与党支持という傾向がなくなっています。PASとPKRを分離した時にはPASに入れていない傾向が強いだろうと思うんですが、今までに比べれば跨ぐ人は増えています。だから、PASには投票しないでUMNOに投票するという前提の考え方はなくなってきています。傾向としては、私はPASに入れた華人もけっこういたと思います。どのくらいインパクトがあったかのかはわかりませんが。

話し始めたのでついでに、今の山本さんのコメントについて。私はここからがすごく興味深いところだと思うんです。選挙は投票行動一発ですから、何らかの不満が高まっているなり何なりで今回はPASやPKRに投票したという人は多いと思います。でも、ここまでの結果になると予想していたかというとそ

うでもないと思います。さっきの塩崎さんのPKRでのマレー人と華人の反応の違いという話も興味深かったんですけど、この後どうなっていくのか。ペナンは野党がほとんどマレー人、与党はかなりの割合が非マレー人というのがはっきりしてしまいました。だから与野党が民族と重なる形になってしまった。ペラもそれにかなり近いことになっています。本当にみんなの意識が変わって、もうみんなマレーシア人だということになっているんであれば、そういう構成のところで何らかの政治的対立があっても、それが民族の論理で語られるのではなく、単に与野党として行なわれていくことになると思います。それがこれからどうなっていくのかは、まだ選挙が１回あっただけだから確認できないと思うんです。だからむしろこれからどうなるかがすごく興味深いです。

参加者　さっきの山本さんの提起ですが、マレーシアの人々はBNのシステムにさんざん慣れ親しんできて、そういうやり方を学んできたわけです。今回野党連合がかなりきっちりできそうだという見通しができた段階で、みんなマレーシア人だと思わなくても野党に投票できるようになったとも考えられます。つまり、野党もBNと同じような方法で配分をするのであれば、まさにBNのオルタナティブとして野党側が同じことをやってくれるわけです。仮に野党が政権を取ったとしても構造は同じ、民族ごとの配分をやってくれるならそれはそれでいいということで、必ずしもマレーシア人のマレーシアにならなくても済むような雰囲気を今回強く醸し出していたということではないでしょうか。野党が勝っても根本的には変わらないかもしれないという雰囲気があったのかもしれないと思います。